

# ここに開く 21世紀の協同

## ——東北集会在が示したもの

菅野 正純 (協同総合研究所副理事長)



### 人間の生き方に迫る「協同」への問い

1996年東北・仙台での全国協同集会是、労働者協同組合の側からは、高齢者協同組合づくりを本格化させて地域の人々のネットワークを格段に広げるとともに、労働者協同組合法の制定を具体的な課題とする段階に達する中で開催されました。他方、広く日本社会においては、非営利協同組織がかつてなく広がり、質的に深まる中で、集会是それらの出会いと交流の広場となりました。とりわけ東北での目を見張るゆたかな協同の営為が参集したことによって、「生命・労働・地域の再生——21世紀の協同へ／東北からの発信」という集会テーマを、文字通り掘り下げることができました。

記念講演において、井上ひさしさんは、宮澤賢治の生涯を通して、富める者がますます富み、貧しい者がますます貧しくなる社会のあり方と抗い、すべての命が輝く共生社会を願って、大地に生きる人々自身が科学と芸術をわがものにしながら、自らの人間としての多様な可能性を発現していくことに、協同の思想の核心を据えました。

全米退職者協会パーキンス次期理事長は、高齢者の人間・市民としての尊厳という熱い精神に支えられ、政治・社会運動と経済主体としての活動を大規模に統一させた、「もう一つのアメリカ」からの「連帯革命」のメッセージを伝えてくれました。

こうした記念講演にも象徴されるように、東北

協同集会是、人間の生き方総体に迫りながら、21世紀の協同を開きました。

小論においては、東北集会在が提示した、21世紀の協同の課題と、それを担う人間ネットワークのあり方という点から、筆者自身の総括を述べさせていただきます。集会在が達成した地平を大切に活かして、協同の理論と思想の新たな創造を共に開始し、非営利協同の人間ネットワークを大きく広げる、きっかけとしていただければ幸いです。

### 労働を〈生命・いのち〉の根源から

東北集会是、第1に、〈生命・いのち〉の根源から労働をとらえなおし、その再生への希望と意志を表明しました。

宮城・桃生産直センターの白石定利さんは、「40度近い温度の部屋に置いても花も咲かず、腐りもしないブロッコリー」「切れば血が出て当然なのに、止血剤に浸けて売られる魚」といった不気味な「食」の実態を踏まえて、次のような力強いメッセージを私たちに発してくれました。

「命を支える食料の生産者は、誠実さを失ってはならない。消費者は、自分は動物であり、ヒトであることの再認識を」

「不健康な暮らしをしても、人は心の奥では健康を願っている。健康を支える仕事・心地好い仕事は必ず発展する」

東京で「自然共生家造りの会」「安暖邸建築研究所」を主宰されている田久保美重子さんは、「個

人的なレベルで『家造り』を行っていた結果、廃材による地球環境汚染や、人間が生き物であることを忘れたかのように使われる化学物質が人体汚染を引き起こしている」現状に警告を発しながら、「住まい手と造り手が理解し合い、住まい手が一から参加する・構造的にも、資金的にもガラス張りで行われる・人にも環境にも融合する家造り」を呼びかけました。

岡山の精神科・林病院の清水谷巖専務は、福祉の分科会で、福祉労働が「スタッフも当事者も、本当に人が成長し、生きがいを感じながら自己を実現していく場としての形にもなっている」とコメントされています。

生命と生活の立場からの、労働と労働の連関＝協働連関の自覚的な再構築こそ、21世紀の協同の、第一の課題であると言えましょう。

### 〈生きる場〉としての地域の再生へ

東北集会是、第2に、人と文化、自然といったそれぞれの地域が持つかけがえのない資源を活かした、〈生きる場〉としての地域のゆたかな再生の実践を結集しました。

「自然の力・身の回りの資源をうまく暮らしの中に取り入れる技と知恵を持っている元気なお年寄り」を「名人地図」にまとめ、「暮らしの協同体・りんごの会」でそれらの能力や資源・情報を登録し、活かしあう山形県朝日町の実践（「生活地理研究所」菅井正人さんの報告）。

山が海に迫る漁村の町で、木を活用して器づく

りに取り組み、新しく開発した魚料理をこれに盛って、「町を訪れた人々への新しいもてなしの形」をつくりだした宮城県唐桑町の実践（「まちづくりカンパニー」戸羽芳文さんの報告）。

「農作業や牛飼いかしていなかったお母さんたち」が、地域に継承されたそば打ち技術と水車小屋を活かして、そばの栽培からそば打ち、店の運営、イベントまでやりきっている岩手県江刈川地区の「森のそば屋」さん（同「創夢長」・高家章子さんの報告）。

何よりも驚きだったのは、文化が地域づくり・仕事おこしの牽引車となっていることです。会津の文化活動から受けた衝撃については、本誌55号で述べた通りです。「くさい・汚い・東京で上映されているいい映画が見られない」地方の映画館のみじめな現実を、「映画の中身で上映作品を選定できる映画ファンのための映画館を、映画ファンがお金を出し合って建設し運営する」取り組みで打ち破った「山形フォーラム」の長澤裕二さんの報告も注目されます。

これらのいずれもが、地域に腰をすえた、本当の意味でゆたかで文化的な生活を創造する、21世紀の協同のもう一つの課題を示しているように思われます。

### 「みんなの命を輝かす」〈共生社会〉へ

第3に、「自分らしく生きる」ことと「みんなの命が輝くこと」が一つになる〈共生社会〉への願いが熱く表明されたことです。

秋田県精神障害者家族会の宇佐美泰雄さんは、「協同」の中に「官主導、経済万能の利己的社会の行き詰まりからの脱却、共生社会への転換」の動きを読まれています。

仙台の共同作業所「わらしべ舎」が、「黄ばみと臭いのない石鹸」を製造し、「廃油の完全リサイクルシステム」を完成したことは、障害者を包む労働と生活のコミュニティの新しい可能性を示唆してくれています。その背景には、「わらしべ舎を支えてくれる沢山の人々の生きがいも創っていききたい」と「生きがい創造部」を設置するという、徹底したノーマライゼーション思想があったものと思われま（佐藤郁子さん、樋口道夫さんの報告）。

清掃の新しい方式を組合員と共に定着させた経験を通じて、「自分たちが働くことを考えて創り出すこと」を「協同組合の楽しさ」だと言うセンター事業団・郡山出張所の城戸貴久雄さん。「自分がちゃんと食べていけるとともに、人と出会えて、環境とか人を大切にしていける仕事」として、仙台で友人と「自然食レストランおひさまや」を営む鳴原幸恵さん。こうした仕事おこしの発言にも「共生のこころ」の確実な広がりを感じることができのではないのでしょうか。

リストラにあって、会社とは「違う世界、もっと違う価値観、人の関係をこれから真剣に求めていきたい」という人が集い、「高齢者自身が必要とすること、あるいは同じ仲間が困ったり、つらい経験をしたことから、こうあったらいいというところから出発」する新しい「事業」の芽が生まれている、東京高齢者協同組合は、それ自体が社会の中の一つの共生社会なのかも知れません（田中羊子さんの報告）。

栗原彬氏は、アイデンティティが、「自分らしさの一貫性」と、その「他者・共同体による共有」の二つの契機から構成されるという、エリクソンの主張を紹介しつつ、「一人ひとりが自由で、個が生かされながら、他の人と共働する結びあい」＝ネットワークの中での「生命政治の担い手としての市民」の自己形成を論じています（『くや

さしさゝの闘い』、新曜社）。「自分さがし」と「共生社会」への転換は、まさに一体の過程であると言えるでしょう。

一つひとつの協同のかけがえない実践の交流の上に、「共生」という21世紀の協同の総体的な課題が東北集会において提示されるに至ったことに注目したいと思います。

### 「協働」を根底にすえた協同組合の展開

東北集会は、第4に、そのような協同の現代的課題を達成しうる、21世紀に向けた協同組合の事業・組織・運動の展開方向を浮かび上がらせた。

人と人との結びつきの再生と高齢者の新しい「役割と仕事」を求めてきた高齢者協同組合は、「仕事・福祉・生きがい」の総合協同組合、支える人・支えられる人が共に参加し、役割をも変動させる「複合協同組合」に、必然的に到達しました。

生協の中からは、足元の職員労働を労働者協同組合的に再編するとともに、老いの問題の事業化や農業と地域の再生に協同労働＝協働を広げようとする方向が示されました（生活クラブ千葉・池田徹さん、仙台共同購入会・小野瀬裕義さん）。

農業では、例えば、山形の農事組合・米沢郷牧場が、高齢者や中国帰還者を包み込んだ生産協同組織「ファーマーズクラブ赤とんぼ」や、農家の主婦が自ら生産基準を表示し値を付けて農産物を販売し、生活者の交流を組織する「ファーマーズマーケット道草」などを次々と生み出していることが注目されます（伊藤幸吉さん）。

北海道旭川・道北勤医協の山田浄二さんは、医療の立場から、自らの組織を「医療技術者の協同と住民の協同の結合体」としてとらえるとともに、「高齢化社会を支え、社会保障の公的責任を果たさせる非営利協同のネットワーク」を展望されています。

21世紀の協同組合は、人間社会の本質である協働のネットワークを、生命と地域の再生の立場から自覚的に再構築し、「共生社会」を創造する事

業・運動体として発展することが問われており、それを有効に達成する上で多様な主体から構成される「複合協同組合」や、公共業務を自律的に遂行する「社会連帯協同組合」など、既存の枠組みにとらわれない大胆な実験と模索が求められています。労協や高齢者協同組合の価値も、そうした大きな協同の展開の中で何をなすうるかによってこそ検証されるでありましょう。

### 非営利・協同のネットワーク

最後に、東北集会は、さまざまなNPO（非営利組織）と協同組合・労協が出会い、（方法的には未熟であったとはいえ）準備段階から共につくる集会となり、双方に大きな刺激をもたらしつつ、新たなネットワークの出発点となりました。

仙台で週1回、高齢者への昼食の調理宅配を行っている「グループゆう」の中村祥子さんは、「自らが仕事をおこし、働く者の平等と経済効率優先ではない社会づくりを目的としている点は、私たちの目的と重なる」と労協への共感を述べていただきました。

中村さんは同時に、「ワーカーズとして労働責任を持って経営や出資を分担するほどの積極性はないが、PTAや趣味を続けながら週1日、2日だったらボランティアをしてもいい。そんな女性が無理なく始められる社会参加の形態」であり、その活動が「家事の社会化を声に出せないでいた女性を力強く後押し」するところに、NPOとしての自らの組織の存在意義を見出されています。

同じ仙台で、「ごみを作らない、ごみを出さないための、そして出してしまったごみはどうリサイクルできるのか」を提言し働きかけ続けている、「ACT53」の活動も注目されます。地場の野菜を「市」で届けるとともに、産地情報・交流誌を発行したり、地元の野菜を使った料理を研究する主婦グループとも結んでいる仙台の「朝市・夕市ネットワーク」は、多様な非営利・協同の複合になっているとも言えます。

若い事務局員から高齢の幹部まで、労働者協同

組合のメンバーも、草の根の活動を進めるさまざまな人々との出会いに新鮮な感動をいだとともに、交流の中で自分たちの活動の意味を掘り下げられる機会を与えられました。

NPOと協同組合・労協のネットワークは、今後、ますます重要になっていくことは間違いありません。

それは、第1に、両者はともに、「普通の人々」が「共生」をめざして主人公となっていく活動であり、そうして地域の文化を変えていくことによって自ら成長していく存在だからです。

第2に、非営利・協同の大きなネットワークの中で、はじめて両者の事業と運動の本格的な発展が展望できるからです。一方では協同組合や労協、とくに高齢者協同組合自身が、その内部に報酬労働だけでなく、ボランティア労働をも有効に組み込んでいくことが不可欠ですし、他方では、NPOの中からも恒常的な労働や安定的な経営基盤の確立が要請され、協同組合・労協を内外に確立することが要請されると予測できるからです。

そして第3には、大資本や中央政府への過度の依存を克服して、地域自律の総合的な戦略を描いてネットワークを発展させることが求められているからです。

保母武彦氏は、地域の将来像を見すえてその中に個々の事業を位置づけ、地域の資源と条件を活かして、住民の夢と現状を橋渡しする「グランドデザイン」の意義を強調しています（『内発的発展論と日本の農山村』、岩波書店）。

非営利・協同の活動が、行政や大企業の単なる下請・補完物に終わらずに、人々自身による地域づくりの民主主義の主体となるために、知恵と技術と資金を結びつけながら、不断の交流と話し合いの中で共にグランドデザインを発展させていくことを心から期待するものです。